『江戸川大学紀要』第三一号（二〇二一年三月）一―一五頁

『甲陽軍鑑』の大将論に見る武士の主従関係

岡田大助*

キーワード：武士道・甲陽軍鑑・大将

一　はじめに

本稿は、『甲陽軍鑑』における武士の大将論を、まずはテキストの文脈を踏まえて正確に理解した上で、そこに描かれた武士の主従関係を明らかにすることを目的とする。

『甲陽軍鑑』は、戦国大名の武田信玄と武田勝頼の代の武田氏を中心とする武士達の生き様について、法令、道徳的訓戒から、事跡の説話、築城や陣立てといった戦の技術論まで、様々な角度から記された書物である。全二十巻、五十九品に、末書二巻が加えられた大著である。本稿で取り上げる大将論は、そのうち品第十一から十四までで展開されている。

『甲陽軍鑑』は、「武士道」の言葉が初出する文献であり、武士道のテキストとしてよく知られている。日本倫理思想史研究においては、和辻哲郎が『日本倫理思想史』[1]で、かなりの紙面を割いて言及している。しかし、和辻の解釈は、諸所に鋭い理解を示してはいるものの、全体の大枠を、正直、慈悲、智恵といった道徳を重視するもの、と押さえたため、武事を優先する、という武士道としての肝心の点が見落とされてしまっている。そこで本稿では、和辻の見落としていた武事を優先する、という点を、まずはしっかりと踏まえたい。

また、相良亨も「『甲陽軍鑑』の世界」[2]という『甲陽軍鑑』全体の思想を、独自の切り口から再構成する優れた論文を残している。そのなかで、優れた大将についても「手の外なる」大将、すなわち家臣に知恵を盗まれず、独立した大将と押さえ、諸所に優れた理解を示している。しかし、この論文は大将論を主題的に取り上げたものではないため、用語の解釈や、具体例の位置づけなど、大将論としては触れられていない点も残っている。そこで本稿では、『甲陽軍鑑』の大将論を、限られた紙面の中ではあるが、具体例まで含め、可能な限りテキストの文脈を押さえて、精確に理解することを試みることにする。

さて、その上で、本稿でさらに焦点を当てて明らかにしたいのが、そこに描かれた武士の主従関係である。日本倫理思想史研究において、武士の主従関係は、とりわけ重視されてきたところである。しかし、その理解は、おおむね主従の相互的な献身がもたらす心情的な一体感を重視するものであった。例えば、『三河物語』における主君の

二〇二〇年十一月三〇日受付

＊　江戸川大学　基礎・教養教育センター　准教授　日本倫理思想史

「徳川三引付」[3]すなわち武事の優秀性、御慈悲、お情けとそれらの恩恵を受けた家臣との間にみられる、主従の相互的献身とそれがもたらす心情的な一体感が、武士の主従関係の本質であるとされてきたのである。しかしながら、武士道研究において、『三河物語』や『葉隠』にも劣らぬ重要なテキストである『甲陽軍鑑』においては、もちろん相互に与え合う側面も重視されてはいるものの、一方で、すぐれた大将は家臣から独立した分別によって戦について判断したり、公正な裁判や賞罰をしたりできるとされる。他方、優れた家臣の侍もまた、戦においては独立した分別により判断するという。本稿では、この点も踏まえ、単に相互に献身的に与え合うだけではなく、独立した武士同士の主従関係を明らかにしたい。

さらに、近年では、『甲陽軍鑑』の末書に、詳細な技術論が展開されていることが注目されている。[4]これは、代表的な武士道書『葉隠』が、「業（わざ）にて御用に立つは下段」（聞書二-六一）というように、技術よりも心情を重視しているのとは対照的である。本稿では、『甲陽軍鑑』に特徴的な、技術を重視する側面も踏まえた武士の主従関係を理解したい。

二　国を滅ぼす大将の四類型

『甲陽軍鑑』の大将論は、次の言葉から始められている。

我が国を滅ぼし、我が家を破る大将。四人まします。第一番にはばかなる大将、第二番にはりこんの過ぎたる大将、第三番におくびやうなる大将、第四番につよすぎたる大将（「品第十一」[5]）

ここでまず確認しておきたいのは、今から主題として論じられるのが、国を滅ぼし家を破る大将の四つの類型についてであるということである。以下の論では、右に挙げられた四通りの大将について、一品ずつを当てて詳しく述べられていくことになる。本稿では、まずそれぞれの大将について一節ずつ当てて、その内容を詳しく見ていくことにする。

なお、本文中にはさらに、それら国を滅ぼす大将との対比で、優れた大将についても論じられている。この点については、本稿では国を滅ぼす大将について一通り論じたあとで、改めて節を分けて論じることにしよう。

(1)　ばかなる大将

国を滅ぼす大将の一番目に挙げられているのは、「ばかなる大将」である。したがって、この品で中心的に押さえるべきは、「ばか」（馬鹿）の内実である。その辞書的な意味は、愚かで、本来の働きを果たさないことである。また、品第十一の題名には、同じ大将のことを「どんすぎたる大将」と言い換えている。このことからすれば、馬鹿とは「どんすぎる」ことであるといえる。「どん」とは、本来なすべき働きが鈍いことである。

次に、馬鹿の中心となる意味をさらに理解するために、冒頭に位置する総論的な規定を引いて解釈しておこう。

先、第一に、ばかなる大将。是を処によりてうつけとも、たわけとも、ほれものとも申也（まうすなり）。此ばか大将のしかたは、たわけても、かならず、心は、たひらく、剛なるものにて、我がまゝなるゆへ、**我が身をわすれ**、遊山・見物・月見・花見・歌・連歌・し・れんぐ・能・踊りなどに好き、又は、げいのふをもつぱらにし給ひ、たま〳〵ぶげいの弓・へひほう・馬・てつぽうをけいこあれども、その心たわけなるゆへ、**弓矢のみちへはをとさず**、げいしやのやうにしなし、いつも「よろしくわれは国持ならん」とおも

ひ、**弓矢のみち、ぶ心がけにて**、我がすることをば、何をもよきこととばかり存ぜらるゝにつき、そのひくわん衆は大将のゑ給ふこともゑぬことも、みなよきとほむるものなり。ほむるは尤道理にて有り。（「品第十一」、なお引用中の太字は強調のため論者が付した。以下同）

はじめに、馬鹿なる大将について、地域によって言い方が異なるということで、他に三つの規定がなされている。すなわち、「うつけ」とも、「たはけ」とも、「ほれもの」ともいうとある。まず、「うつけ」とは、辞書によれば、中身がなくからっぽであるという意味である。次に、「たはけ」とは、正常ではなく浮かれていることである。最後に、「ほれもの」の「ほれ」とは、放心する、ぼんやりするという意味である。

続けて、この馬鹿な大将について、さらに具体的に、わがままなので、（戦闘を生業とし職務とする武士であるという）我が身を忘れて、様々な趣味や芸能を専らにして、たまに武芸の稽古をしても、戦に勝つためではなく芸事のようにして、弓箭の道を疎かにしているとしている。このことから、馬鹿なる大将の馬鹿の内実は、武士が本来なすべき武事を疎かにしている点であると解釈できる。[6]

それがなぜ馬鹿の説明になるのかというと、武士として本来果たすべき戦に勝つための行為をおろそかにするからである。それが鈍過ぎると言われるのは、そのような武事の働きが鈍いからである。となると、「うつけ」とは、武士としての実質がからっぽということであり、「たはけ」とは、武士として正常ではなく浮かれていることであり、「ほれもの」とは、武士としての正気を失って放心しているということである。

さて、右の引用でさらに注目されるのは、このような馬鹿な大将は、いつも自分のすることは正しいとうぬぼれているということである。この点が、さらに次の欠点へとつながる。すなわち、このような大将の被官は、大将の良いことも悪いことも、皆良いとと褒めるようになってしまうという。

ところで、ここに限ったことではないが、引用に続く部分は、内容を少しずつ加えながらも同じようなことを執拗に繰り返すような論述になっている。重複する内容も多く、それを丁寧に辿る紙面の余裕もない。そこで、品第十一の続く部分については、以下、筆者なりに要旨を整理して再構成するに留める。

さて、大将が馬鹿でうぬぼれていると、大将が良かろうと悪かろうと家臣が言ってくるお世辞に乗せられ、智恵を盗まれるようになる。すると、家中に善悪の分別もなく主君を褒めて私欲を満たそうとする佞臣が出世する。となると、その佞臣が自分と同じような性質を持った身内やとりまきを取り立て、家中に私欲を満たそうとする佞臣が蔓延する。他方、道理の分かる優れた少数の家臣は、佞臣に妨げられることを予想して何も言わなくなる。仮に、言ったとしても、数の論理と、あの手この手で狡猾に排除される。そうすると、訴訟沙汰一つとっても、道理ではなく佞臣の贔屓によって決まるようになり、家中に道理が立たなくなる。また、家が総合的な実力を保つには、様々なタイプの人が必要であるが、馬鹿な大将と佞臣は、同じようなタイプ、しかも道理の分からぬ佞臣だけを集めてしまう。さらに、そのような佞臣は、武士としての実力も実績もないのに、プライドが高いので、自分達のわずかな実績を大げさに言いつのり、実力と実績のある家臣を排除する。

このように、馬鹿な大将の治める国は、武事に疎かでわがままな大将と、それを褒める佞臣の蔓延によって、道理の分かる家臣の意見も通らず、訴訟の道理も立たないようになる。さらに、実力のある武士が排除され、武家としての実力が衰えて滅びることになる。

そして、このような馬鹿な大将の代表的な例として挙げられるの

が、今川義元と今川氏真である。今川義元の統治下の駿河の国に、戦の達人であった山本勘助が、仕官を求めて滞在していた。勘助の戦の実力を見て取った庵原が、家老朝比奈を通じて、彼が城取りや陣取りをはじめ一切の軍法に通じていることを理由に仕官の推薦をしたが、義元は採用しなかった。その理由は、士卒も従えず城も持ったことがないものがどうして軍法に通じていようかと皆が申し立てたからである。加えて、勘助が二、三度手柄を立てた際には、彼の剣術が駿河で流行っていた「新当流」の流派でなかったことを、皆が言い立てた。どの流派にも実力があるものもないものもいるはずなので、的外れな批判である。さらに、勘助が隻眼で指も揃わず片足がびっこを引いているなど、たいそう醜い姿をしていたことも、理由の一つと推定される。結局、勘助は九年駿河に滞在したが、義元は取り立てなかった。馬鹿な大将は、武事を疎かにしているので、武事に優れた者の実力が分からず、見た目や人の噂で判断し、その力を家に取り入れることができないのである。

さて、義元が織田信長に桶狭間の戦いで敗れて殺され、氏直の代になると、今川の家中はさらに衰えた。品第十一の末尾において、馬鹿な大将の端的な例として挙げられているのは、この氏直である。『甲陽軍鑑』が強調しているのは、今川家には家に伝わる朝比奈などの優れた家老がまだ四、五人いたが、氏直が彼らを尊敬しなかったことである。他方、氏直は武事の実力も実績もない佞臣の三浦右衛門を取り立て、家中に三浦とその親類や取り巻きばかりが出世して幅を利かせるようになった。このような采配をしたため、三河の国がほとんど敵となったという。

そして、氏直が三河で戦をした際には、遠江で飯尾連龍が反乱した。氏直は大名だけあってさすがに心は剛であったため騒ぎ立てるようなことはなく、飯尾も根のない反乱だったため、すぐに鎮圧して大事にはいたらなかったが、このとき、三浦右衛門とその取り巻き達は大騒ぎして右往左往するだけであったという。

さらに、永禄十一年の信玄の駿河攻めの際、氏直が駿府の城を開けて、遠江の掛川の城に退去したときには、三浦右衛門はすぐに逃げ出してしまい、右衛門の親類や寄子も、氏直に付き従うものは一人もなかった。他方、駿河にも強い侍は沢山いたが、三浦のような佞臣が幅を利かせていたため、みな氏直を恨み、供をするものは少なかった。そして皮肉なことに、それでも氏直に最後まで供をしたのは、三浦が寵愛を受けていたときに退けられていたものたちであった。ちなみに、一番威勢の良かった三浦は、逃げて遠江の高天神城の小笠原を頼り、そこで成敗されている。氏直は、心は剛であったが、少々わがままで人を見る目がないのは明らかであったとされる。最後にそれが、証明されたのであった。

(2) りこんの過ぎたる大将

国を滅ぼす大将の二番目に挙げられているのが、「りこんの過ぎたる大将」である。まず、はじめの定義を引いて、その中心となる性質を解釈しておこう。

第二番には、りこんすぎたる大将なり。①この大将の様子は、大略がさつなるを以て、おごりやすうして、めりやすし。よき武士は大身、小身によらず、能ことあれどもおごる事なし。あしき仕合の時も、さのみめらず。これは賢にして心剛なる故かくの如し。不肖は無分別にて心ぐちなる間、大身・中身・小身ともにあやまり多し。②殊更りこん過ぎたる大将は、邪欲ふかければ、内の者に知行をいだすにも、悪所をゑらみいだして、ぢそつにくるゝ。その上諸侍をせばめ、知行百貫取る者をば、くわやくを申かけ、五拾貫はへつらふて取り、五十貫の侍をば二十五貫へつらひ取りなさるゝ故、上をまなぶ下なれば、諸侍衆、百姓をも又す

えぐに至り、困窮のわきまへもなく、取りつくす。（「品第十二」、なお引用文中の①等の番号は解釈の便宜上論者が付した。以下同）

りこん（「利根」）とは、生まれつき心の働きが優れていることである。それが過ぎるのだから、心が働き過ぎるということになる。では、その心が何に働くのか。それは、②以下に記されているように、とりわけ、邪欲、すなわちよこしまな私利私欲を満たすために働くとされる。つまり、特に私利私欲を満たすために心が働き過ぎるというのが、利根過ぎる大将の中心となる性質である。

また、①の部分では、この大将の様子が、「がさつ」すなわち言動が下品で荒っぽく、奢りやすく、「めり」やすい、すなわち、落ち込みやすいという。それとは対照的に、優れた武士は、大身、小身に限らず、幸せでも奢ることなく、不幸でもさほど落ち込むことない。その原因は、優れた武士は賢くて、心が「剛」すなわち強くて固いからである。他方、未熟な武士は、道理を見分ける分別がなく愚かなので、身分を問わず、誤りが多いという。

続けて、②以下では、私欲を満たすために心が働き過ぎるという点について、より具体的に記されている。すなわち、利根過ぎる大将は、家臣に知行を与えるときにも、悪いところを選んで与える。さらに、もろもろの侍を追い込み、知行百貫を取るものには課役を申し懸け五十貫をとり、知行五十貫の侍からは二十五貫を取る。つまり、家臣から可能な限り不当に搾取するのである。すると、下の者は上の者を真似るものなので、それらの搾取された侍が、さらに百姓を、未来にどれほど困窮するかも弁えずに搾取する。つまり、家中に、上のものが下の者から私欲を満たすために搾取する構造が、連鎖的に蔓延するようになってしまうのである。以上が、冒頭の定義から読み取ることのできる、利根過ぎる大将の性質と、それがもたらす家中の様子である。なお、引用の少しあとには、このような大将の性質が、「無慈悲」であるとまとめられている。慈悲とは与えることであるので、無慈悲とは奪うこととなる。私利私欲が働き過ぎると、無慈悲に奪うというところに帰結するのである。[7]

ここからは、前節同様、要旨のみを辿ることにしよう。続けて記される、利口すぎることから必ず派生する欠点は、自慢があることである。自慢があると、自分のすることはすべて他から非難されまいと思う[8]ので、古今の名大将や名人の言葉ややり方を用いず、何もかも自分一人の考えでし始めようとする。ときたま、物を知っている人を近づけ、物を聞こう、読もうとしても、利口を先立てて、一部を聞き、よく分かっていなくても、そのまま分かったといい、早合点で済ませてしまう。

このような、利口過ぎる大将が早合点で上辺ばかりの浅はかな考えですることは、朝令暮改ですぐに変わり、つねに新しいことを始めようとして、賢人の言葉を聞いても、私欲を満たすことに合わせて、搾取のための工夫へと変えてしまう。すると、そのような大将の傾向を見て取った庶民や町人の金持ちが、搾取の工夫を進言して家中で取り立てられるようになる。やがて彼らが金の力を上手く使って出世し、その家の出頭衆の縁者となり、奢った振る舞いをするようになる。すると、古くからの侍のほとんどが、それを羨ましく思い、奢って横柄になり、同僚への礼儀作法を失って、いつも欲得の話をするようになり、家中が賤しくなる。こうして、家中の侍の百人中九十五人までが、町人の気質となる。残る五人に、男を立てようとする人、すなわち、私利私欲を抑制して武事に励む人がいても、皆で悪口をいって、頭も上げさせない。反論すれば陰口をいって、物も言わせなくなる。そもそも武事に励むのは知行のためでもある。それで損をしてはたまらないので、残り五人中三人も、考えを変えて町人に近づくようになる。こうして、家中のほとんどが私欲を満たすことを本性とする町人

気質になってしまうという。

このような家中では、上から下まで私欲を満たそうとして意地汚くなり、人を出し抜こうと思うので、主人は被官に配慮せずに使おうと思い、被官は主人に忠節を尽くして様々な奉公をするのではなく偽りで扶持給を取ろうと思うので、最下層の侍や小者が給料を取り貯めてやめてしまい、奉公人の多くが塩魚などを売る商人になるものである。

また、利口過ぎる大将は、行儀が悪くて乱暴に色を好み、この点でも人々に恨みを受け、誹られる。そして、このような行儀が悪い大将は、義理を知らず、無慈悲で無分別であるため、上辺を繕って嘘をつくので、戦のとき、万が一勝っても、家臣の手柄で勝ったのを、自分の手柄のように言い、その偽りを繕うために、罪のない家臣を嫉み、追い出すか成敗してしまう。

また、利根の過ぎた大将は、政治をいい加減に行ってしまう。すなわち、うぬぼれから早合点をして物事を習っても深いところまで理解しないので、百姓が大工をして鉋（かんな）でけずるところをのこぎりで引くように、いい加減に国の政（まつりごと）を行ってしまうという。

総じて、利口すぎる大将は、「無分別」すなわち物事の善悪の道理が分からず、「ぶ穿鑿（せんさく）」すなわち物事について深く調べたり考えたりしないので、何が手柄で、何が手柄でないのかも知らない。必要のないところに強みがあって、家に伝わる家老なども咎（とが）もないのに憎み、親不孝で親とも仲が悪くなり、非業に身を破るものである、という。

そして、品第十二の末尾では、このようにして滅んだ大将の具体例として、武田信玄の嫡子、義信（よしのぶ）の行状が挙げられている。

川中島の合戦のとき、信玄が危機を察知して一時退却を指示した際、義信が後にそのことを「退くまじき戦で退いた」と強く非難したことがあった。生涯にわたって勝ち続けた戦の達人である信玄が、戦の道理を踏まえて状況を的確に判断し、戦略的に一時退却して総合的な勝ちにつなげていったのに対し、戦についての技術も知識も経験も未熟で、何事においても深く考えず、戦の道理も分からない義信が、それでも自分の考えが正しいと思い込み、要らぬ強みを発揮して、信玄を非難したのである。その結果、親子は仲違いしてしまった。その後、僧侶が仲裁に入ったが、お互いに妥協せず、さらに不和になってしまう。すると、義信はしかるべき理由もないのに謀反を企てたとされる。その理由は「信玄も父信虎を追い出したのだから、自分も信玄を討ち取ろう」というものであった。しかし、信玄が信虎を追い出したのは、信虎がいわれもなく嫡子である信玄を排除しようとしたからであり、十分な理由があってのことである。他方、万事嫡子の義信を立てていた父の信玄を義信が討とうとするのは、道理に反することであった。やがて謀反は発覚し、重臣の飯富兵部少輔（おぶひょうぶしょうゆう）と長坂源五郎は成敗された。そして義信自身も、三十歳で自害したとも病死したともいわれる。

そして、このような義信のありようは、ほとんど、これまで見てきた利口過ぎる大将に当てはまるとされる。さらに、その理由に、町人を取り立てて庶民を搾取し、また、乱暴に色を好んで、百姓、町人の嫁や子どもに手を出して様々な所に隠しおいていたなど、行儀が悪いことが多すぎたことも加えられている。

(3) よわすぎたる大将

国を滅ぼす大将の三番目に挙げられているのは、よわすぎたる大将である。まず、品第十三の最初の定義を引いて、その中心的な性質を解釈しておこう。

第三番に①おくびやうなる大将は、②心ぐちにして女に似たる故、③ひとをそねみ、襟元につき、いじ、ふがひなくして、いかにもぶせんさくに、分別なく、むぢひにて心いたらねば、人を見

知り給はず、きのはしりたる事なく、かうりかたまりたるやうなれども、ひよんなり。④是偏へによわき大将の女のごとくにありて、心ぐちなるを以てかくのごとし。⑤かやうの人も大将といゑば、しかも大名にて二万三万、あるいは五万六万の人数を持ても、かたじけなく存ずるものは、百人の内そとならでなし。⑥さだまりてみれんなる大将は、心せばく、いじむさけれど、器用だてをあそばし、知行・所領・金銀・米銭を、善悪のあて事もなく人にくれ、くふうなけれども、分別あるふりをして、殊外ねちみやくにて万事ねばし。（「品第十三」）

はじめに、弱すぎる大将の弱さについて解釈しておこう。まず、何が弱いのかといえば、同じ巻ですぐ後に対比される優れた大将が「心剛」とされていることからすると、心が弱すぎるということである。そして、弱すぎる大将は、①の部分では、臆病な大将と言い換えられている。心が弱いことが、臆病とほぼ同義とされているのが分かる。したがって、心が弱くて臆病というのが、この大将の中心となる性質である。なお、後に具体例として挙げられる上杉憲政[9]の性質でこの弱さ臆病さに具体的に対応しているのは、この大将が自ら戦に出陣しないことである。そして、そのような臆病さから派生して、以下の内容も出てくることは、最初に押さえておこう。

続けて、②の部分では、臆病な大将は、心が愚痴で女に似ている、とされる。これが、次の中心的な定義である。愚痴とは、愚かで物事の理非が分からないという意味である。するとどうなるか。続くところ③の部分を見ると、ひとをそねみ、こびへつらい、意気地がなくて、いかにも物事を深く考えることがなく、分別がなく、無慈悲で心が至らないので、人を見る目がなく、心が機敏に働くこともなく、氷が固まったようで、奇妙である、という。その要点は、後述する憲政の例と考え合わせると、自分で深く考えてありのままの事実を見抜き、人を見分けたり善悪の判断をしたりすることができず、心の働きが鈍いということである。④で、②と同趣旨のことが繰り返されているので、ここまでが、女に似て愚痴であることの結果であり、またその具体的な説明にもなっている。

そして⑥の部分では、このような大将は、必ずといっていいほど諦めが悪く、意地きたないが、ことさらに器用なふりをして、知行・所領・金銀・米銭を、対応する善悪の手柄もないのに人に与え、工夫はないのにことさら分別のあるふりをして、とりわけぐずぐずして決めかねて、万事において鈍い、という。すなわち、このような大将はこれまで見てきたような弱さゆえにほとんどの家臣から尊敬されない（⑤）が、そのことを諦めきれないで、優れたふりをして家臣に手柄もないのに褒美を与えて歓心を買い、分別あるふりをする。しかし、実際には是非善悪を見分ける分別もそれに基づいて賞罰を自分で決断する心の強さもなく、すべてにおいて鈍い、というのが、右の引用から読み取れる弱すぎる大将の性質となる。[10]

続けて、品第十三の続くところから、臆病な大将の性質のさらなる内容を見てみよう。臆病な大将は、義理を二の次にして、外聞を第一とするので、家臣にへつらって、忠、不忠も問題とせず、先々の考えもなく、勇敢、臆病も選ばず、ただ大勢のほうを専らに守り、心が勇まない、という。つまり、外聞を気にして大勢の意見に流され、道理に基づいて先々まで考えて賞罰を与える強い心・決断力がない、ということである。

それでは、このような大将の下での奉公人の様子はどのようなものか。それは、みなすべて無心がけで、心の奥底はなまって、いかにも口が上手く、物事を深く調べたり考えたりせず、贔屓贔屓にものをいい、ひときわ雑で、鋭い意地は少しもなく、何事も表面的に分別する。臆病な奉公人は、良いと評判の人に会うと、相手も自分と同じと思い、同僚に自慢するために悪口をいってなぶる。良い人は、はじめ

は家族の迷惑を考えて我慢するが、あまりにひどくなると、覚悟を決めて果たし合いに及ぶ。臆病な者は、さんざん逃げ回った挙げ句に斬り殺される。親類縁者は敵（かたき）を討とうというが、口ばかりである。このように、臆病な大将のもとでは、奉公人も上を真似て、臆病となる。そして、このような臆病な大将と奉公人が蔓延する家中では、良い人も、やがては弱い人ほどではないにせよ、少しは悪くなってしまう。以上が、品第十三に描かれる臆病な大将の性質と、その家中の様子のあらましである。

そして、品第十三の後半で、臆病な大将の代表例として挙げられるのが、上杉憲政である。憲政は、室町幕府の関東管領（在位一五三一～一五六一）であり、一時、上野、武蔵の国など広大な土地を領有する当時有数の大大名であった。しかし、伊豆、相模を領有して台頭してきた後北条氏の氏康が、度々戦をしかけてきた。その争いは八年に及んだが、大将の上杉憲政は、相手を小国と侮ってついに一度も出陣しなかった。その結果、上杉家は、大合戦にも小競り合いにもすべて負けてしまったという。

はじめは、憲政の家臣の出頭人であった、菅野大膳（たいぜん）、上原兵庫の二人も、北条程度のものは憲政の旗本に五、六人はいると侮り、憲政が出陣すれば、一度に押しつぶせよう、と出陣を請うが、臆病な憲政はそれでも出陣しなかった。他方、上杉家の良将、長尾伊玄は、北条氏があなどるべからざる大敵であることを度々憲政に諫言した。そこで、一度は憲政も納得して、菅野、上原に相談したところ、二人はその気になれば北条などはいつでも倒せる小敵であると吹き込んだ。すでに確認したように、弱すぎる大将・憲政は、臆病で自ら出陣できず、加えて、道理や善悪を見分ける分別も決断力もないので、人の意見によって朝令暮改で考えをすぐに変えてしまうのである。さらに、菅野、上原は、家老の知行を増やせば、みな主君をもり立てるだろうと進言した。そこで憲政は、対応する手柄もないのに、家老達に知行を与えてしまう。その結果、なかには主君憲政以上に知行を取る家臣が何人も現れた。憲政は、自分の判断で道理に照らして賞罰を与えることができず、他人の言いなりになって知行を与えて、大将として維持すべき最低限の知行まで減らし、自らの力を弱めてしまうのである。

そこで長尾は、ささいなことでたまたま憲政の不興を買っていた信頼できる優れた武士、井又、本間を、上杉家を出奔した体にして北条氏に侵入調査させた。この武略はみごとに成功し、井又、本間は、北条氏康が文武両道に優れ、家臣を掌握した、侮るべからざる大敵であり、上杉家の大身衆の多くも北条氏と通じていることを調べ上げ、長尾を通して憲政に報告した。憲政は、長尾の諫言を受け入れ、大身衆の次男三男を憲政の本拠地である平井につめて奉公させ、武具の準備や質素倹約を義務づける法度を制定した。また、井又、本間を召し出し、上杉家の重宝と高く評価した。長尾、井又、本間の活躍によって、上杉家は持ち直すかに見えた。

ところが憲政は、菅野、上原の話を聞いて、またも考えを変えてしまう。その話とは、北条早雲はもともと乞食であり、二代目の氏綱は信虎に負けた。三代目で当代の氏直も和歌を作り、若衆に溺れ、武事は大したことがない。家臣にも武事に優れたものはほとんどいないとのことである。また、井又、本間の武略は二人の帰参のための作り事である。武略は自分よりも大敵に用いるものであり、小敵の北条氏に使う必要はない。二人の言うことに従い、大身の人質を召し置く必要はない。平井においては、手柄のもの、被官などを取り上げ、知行を沢山与えるべきこと。二人は七年背いていたのだから、せめて七、八年は疎んじるべきことなどであった。相手を貶めている点など、何もかも気に入った憲政は、またしても考えを変え[11]、以降、長尾など、四、五人の優れた家臣を相手にしなくなってしまうのである。

そしてここから、上杉の本拠地、平井の旗本侍衆の行儀がいよいよ

悪くなったとされる。彼らは、武具の支度を止め、菅野、上原が夜、屋敷裏で日々夜々乱舞をし、白拍子に入れ込んでいたのを真似し、みな白拍子と遊山をするようになる。

以後しばらくの内容は、これまでとほぼ同趣旨なので省略するが、品第十三のほぼ末尾には、よく知られた河越合戦について記されている。すなわち、二十三歳の北条氏康が扇谷城河越を奪ったのに対して、上杉家は八万の軍勢で河越を取り巻いた。そして、夜半に合戦となった。その結果は、ことごとく氏康が勝ち、上杉家は負けて一万人余りが討ち死にした。その際、かねてより北条家に通じていた大身の多くが、北条家にしたがった。とはいえ、憲政は無事平井に帰陣した。かつて侵入調査で貢献した本間は、「眼の開かぬ主君のため、本間江州は、今夜夜戦の目明かしなり」と名乗って、北条方の大道寺と出会い「本間江州を討ってこのさしものを北条のある限りは差して下さい」と遺言して討たれた。その後憲政は、また考えを変えて「本間、井又の言っていたことは本当だった」と褒めたところ、人々はまた両人を褒めるようになったという。他方、二人を讒言した菅野、上原は、主君より先に逃げ帰ったが、残ったものも皆逃げ帰ったものなので、別段咎めもなかった。

品第十三は、憲政が臆病だったので考えが浅く、悪い上原、菅野の言いなりになってこの通りであると結ばれている。臆病な大将・憲政は、心が弱く、戦で先頭に立って戦うこともできず、自分でありのままの事実を見て善悪を判断したり、人に賞罰を与えたりすることもできず、人の言いなりになってころころと考えを変え、国を弱め、ついには滅ぼしてしまうのである。

(4) つよすぎたる大将

国を滅ぼす大将の四番目に挙げられているのは、つよすぎたる大将である。これまでの節と同様、品第十四の冒頭の定義を引いて、その中心となる理解を作っておこう。

第四番に、つよすぎたる大将は、①心たけく、気はしりて、大略弁舌もあきらかに物をいひ、智恵人にすぐれ、何事につきてもよはみなることを嫌給へど、しかも、つねにはたんきなる事もなく、少しも喧狂にあり給はず、いかにもしづかにおくふかく見え奉る故、②家老のいさめを申上ぐるも、「何ぞ弱めなることを言上して、気にちがひ申さんか」と存ぜんずるにつき、十箇条の儀は五つもやう〳〵申せども、心にきづかひあるにつき、五ケ条のことも三ケ条は其理屈聞えかね候ものなり。それによって、家老の物云事、みな戯言」とおぼしめして、ぬしの心をほんとして、わがまゝなるしあんばかりあるといへども、（「品第十四」）

強すぎる大将は、「心たけく気はしりて」と定義される。心の勢いが盛んで勇ましく、心の働きが素早いとされる。また、おおよそ弁舌も明らかにものをいい、智恵は人に優れ、何事についても弱みなることを嫌うが、しかも平時には短気であることもなく、まったくやかましく常規を逸しているわけでもなく、いかにも静かに奥深く見るとされる。ここまでを見ると、いままでの国を滅ぼす大将とは異なり、心が強く賢く静かということで、武士としてはいいことずくめであるように見える。

しかし、問題となるのはここからである。②以下に記されているように、むしろ勇まく、智恵も優れているが故に、家臣の話が聞けなくなってしまうのである。すなわち、このような大将が相手だと、家老が諫言する際、萎縮して言いたいことを十分に言えなくなってしまう。すると、家老の言うことの論理が分からなくなってしまい、さらに馬鹿にして聞けなくなってしまう。その結果、一人の我が儘な考えだけで物事を判断することになってしまう。

では、その結果はどうなるか。品第十四の続くところでは、おおよそ次のように言われる。すなわち、名大将だった先代の父への礼儀のため家老を集めて度々談合を開くが、強すぎる大将の下で家老達の言い分が一つも役に立たない様子を見て取り、悪い侍で頭だけに分別があってその場だけの思案をする意地汚い人が出てきて、前代の家老衆だけが発言しているうらやましさから、「今度の代替わりに大将に気に入られて、我々も良い家老の内に入ろう」と思い、一人二人申し合わせて大将のお気に入りになる。実際、長く続く家の奉公人であるので、学問も少しはして、古語を引いても強いことを深い考えなしに申し上げ、大将の心に合うように諫めるので、強い大将は、「それなら自分だけでもない。内の者にも自分と同じ考えのものがあったのだ。特に古人の言葉もあるので、自分の考えも少しも悪くはない」と思う。その古語とは「途中の受用は虎の山によるが如し」すなわち、虎は勇猛な獣であるので餌を食べるのに、餌のあるところへ少しも頓着なく山へ行くのを、勇猛な大将に譬えるというものである。また、「前代の大将より後代の大将は一段と強くなければ、必ず人は褒めないものである。前代と後代とが同じであれば、後代を弱いといって、侍達はもちろん、庶民、町人までも大将をあなどり、命令を聞かない」などと言う。『甲陽軍鑑』の筆者は、この諫めでその大将がなお強み過ぎるのは、もっての外であるという。

生涯にわたって一度も負けなかった信玄すら、計策や武略を用いたのである。にもかかわらず、強すぎる大将は、計策や武略の智恵を弱いのに似ているといって嫌う。その意地を強過ぎるという。何事においても、度が過ぎれば悪いことになるものである。大将が強すぎると、多くの人を身分の大小を問わず非業に死なせるものである。そして、良い侍を非道に失うのは、国を持つ大将の大いなる損である、と。

では、強すぎる大将は、どのようにして良い侍を非道に死なせてしまい、国を損なうのか。続くところでは、まず侍を分類して、上中下並の四種類に分ける。第一の上の侍は、剛強にして分別・才覚のある男である。この上の侍は、戦時も平時も他人には一切構わず、ただ「自分のすることを自らの分別で工夫し、その場に出ると機転のきいた才覚によって手柄を立てよう」とばかり志している。第二の中の侍は、心が剛く機転のきいた男で、上の侍に負けまいと、機転をきかせて走り回る侍である。第三の下の侍は、武辺の手柄を望み、武事を好んで専念し、上、中の侍のやり方を真似ようと、二人に目を付けて回るものである。第四の並の侍は、人並みの男で、その他大勢である。上の侍は百人に二人、中の侍は百人に六人、下の男は百人に十二人、残りの八十人は並である。

さて、強すぎる大将の戦での作法は、後先を考えて慎重になるようなことはせず、何事も強みとばかりあるので、その下の侍達も同様で、少しの小競り合いにも討ち死にの者が多い。右の分類の百人の中で、上中下の二十人の侍は皆討ち死にしてしまう。残る八十人は、強すぎる大将の下で死ぬまいと身を大事にして、手柄も立てずに知行を求めるようになる。強すぎる大将はこれを見て憎み追放する。すると、優れた侍は討ち死にし、古くからいる残りの侍もいなくなり、万事こと欠くようになるので、結局、右の侍より劣った庶民を取り立てるようになるが、それでますます悪い家中となってしまう。

それでは、なぜこのように悪い家中となってしまうのか。その原因は、ひとえに強すぎる大将が強み過ぎて、十の事を十すべて勝とうとするからである。信玄は、「十の事のうち、六つか七つ勝てば十分である。十勝てば怪我があって、その後は一つも勝つことはできない」と度々言っていたという。大将が強すぎると、つねに気負って終に怪我がある。怪我があれば負けて、良い侍はほとんど死んでしまう。良い侍が死んでしまえば、下の侍が残って作法が悪くなる。作法が悪くなれば、武事はさらに弱くなる。弱ければ、強みの過ぎている大将

も、弱い名を取る。だから、強すぎる大将は、やがて弱い大将と同じとなってしまうと言うのである。つまり、強すぎる大将は、長期的に勝ち続けるための思慮分別がなく、強行策を採るため、優れた侍の多くを殺してしまい、その結果、国を弱体化させてしまうのである。

では、強すぎる大将とは具体的に誰のことを指すのか。それは、武田勝頼であるという。その理由は、長篠の合戦で、分別が違って、去年の十二月の備え定めの談合を破り、待っていれば勝てる敵にこちらから攻めかかって合戦したからであり、その策は、論外であるという。そしてその結果、内藤昌豊（昌秀）、馬場信春、真田信綱、山県昌景といった信玄以来の歴戦の勇将の多くを殺し、戦国大名の武田氏を決定的に弱体化させてしまったことは、周知の事実である。

すなわち、『甲陽軍鑑』によれば、敵の大将は強みも分別も成熟した四十二歳の信長とその子ら三人、また海道一の弓取りとされる家康も三十四歳の分別盛りで、息子の三郎も優秀である。敵の領国は、五大将合わせて十四カ国半に及ぶ。今回の長篠の合戦で動員可能な人数は、領国の守りを差し引いて、九万二千。遠国であることから堅く見積もっても七万である。

他方、味方の国は、五カ国で、動員可能な兵力は四万八千だが、領国の守りを差し引くと、一万六千である。その一万六千の軍勢で、敵の七万の軍勢が、しかも柵を三重に備えて待ち構えているところに、面も振らず懸かるのは、柵を十万の加勢と考えれば、十七万の人数が籠もった城を一万六千で攻めるようなものであるという。

信玄はいつも、千人籠もった城を攻めるときには一万の人数で攻めるべきである、と定めていた。五千では危ういとも言われた。つまり、こちらから城や柵などで守り固めた相手を責める場合、十倍の戦力が必要であるというのが戦の道理であるにもかかわらず、勝頼は反対に、十分の一の戦力で攻めてしまったのである。思慮深さも慎重さにも欠けた強すぎる大将・勝頼の敗戦は必然であった。

三　優れた大将と家臣との主従関係

ここからは、これまで見てきた国を滅ぼす大将の性質についてまとめながら、それと対置される優れた大将の性質を確認し、その下での家臣との主従関係を理解することにしよう。

(1)　独自の判断をする分別のある大将とその家臣の主従関係

まず、国を滅ぼす大将に共通する性質との対比から浮かび上がる優れた大将の性質と、その下での主従関係について押さえておこう。

これまで見てきたことから、国を滅ぼす大将は、特定の家臣に智恵を盗まれ、お世辞や自分の気に入る意見に乗せられてその言いなりとなる、という点で、共通していることが分かる。そして、武事を疎かにして趣味に入れ込んだり、私利私欲を満たそうと搾取したり、臆病を隠して不当に相手を貶める意見を喜んだり、あるいは、強行策に溺れて優れた家臣を失ったりして、その国を滅ぼしていった。

これに対して、優れた大将は、家臣に智恵を盗まれ乗せられて言いなりになるようなことはなく、自らの分別によって是非善悪を独自に判断するとされる。ここに、優れた大将の性質の第一の特徴として、自ら判断する独立性を指摘することができる。[12]

それでは優れた大将は家臣の意見を聞かずに何でも自分だけの考えで判断するのかといえば、そうではなく、優れた家臣の意見を良く聞いて柔軟に取り入れるとされる。すなわち、国を滅ぼす大将は、智恵を盗む家臣の意見は聞いてしまうものの、多くの場合、優れた家臣の意見を聞けないことが原因となって、判断を誤り、国を滅ぼしていた。他方、優れた大将の代表とされる武田信玄の家中では、戦の前に、侍大将達がそれぞれ地図を持ち寄って、その国の険難の場を良く話し合っていたとされる。当然、優れた大将はその場にいて、その話

し合いを聞き、全体の戦略を練る参考にしていたはずである。つまり、優れた大将は戦の前の軍議において、広く家臣の意見を聞いていたのである。ここに、優れた大将の第二の特徴として、家臣と会議して聞くべきことは聞き、さまざまな意見を取り入れる柔軟性を指摘することができる。

また、優れた大将は家臣に智恵を盗まれず独自の判断をするといっても、それは思いつきからの単なる独断ではない。国を滅ぼす大将には共通して是非善悪を見分ける「分別」がないとされていたのに対して、優れた大将はその「分別」があるとされている。優れた大将は、自らの豊富な経験を参考にするのはもちろんのこと、右に述べたように家臣の意見を取り入れたり、あるいは古人の言葉に学んだりして、是非善悪の道理を知り、その道理に基づいて判断しているのである。ここに、優れた大将の第三の特徴として、是非善悪の道理を知りそれに基づいて独自に判断する能力、すなわち「分別」がある点を指摘することができる。

ここまでを、まず国を滅ぼす大将の共通する性質との対比から浮かび上がってきた優れた大将の特徴として押さえておく。続けて、このような大将とその家臣との関係についても押さえておこう。

このような大将の下では、上は下に似るものとされていたので、家臣達も、少なくともその一部は、優れた他人の意見や古人の智恵に学びながら、道理に基づき、独自の判断をするはずである。実際、品第十四で描かれていた、百人中八人程度はいるとされる上、中の侍は、戦の際、分別をもって独自に判断し機転をきかせて行動するとされていた。

このように見ると、すぐれた大将の下での主従関係は以下の通りとなる。すなわち、分別を持ち独自の判断をする大将と、独自の判断をする一部の優れた侍とが、戦であれば、勝つという共通の目的に向かって、軍議などで相互に意見を交わし、柔軟に相互の意見を取り入れながら、協力しあう関係であったと推定されるのである。[13]

もちろん、戦には上下関係があるのが原則であるので、上から下への命令が下されたであろうし、命令の遵守は当然求められたであろう。しかし、その戦の方針を決定する際には、優れた侍大将や家老が集まって、皆で意見を出し合って慎重な作戦会議がなされている。意見を交換し、大将が家臣の意見を取り入れる機会はあったのである。その上で、現場の優れた侍達は、決まった作戦は踏まえつつも、許された範囲内で、自分の独自の判断で機転を利かせて臨機応変に戦うのである。ちょうど今日のサッカーなどのプロスポーツのトップチームが、チームとしての高度な戦略や戦術を監督の指示で共有しつつ、個々の選手が与えられた範囲内で臨機応変に独自の判断でプレーするようなものと理解すればよいだろう。

(2) 国を滅ぼす大将達との対比

次に、国を滅ぼす大将のそれぞれの特徴についてまとめながら、それらとの対比から浮かび上がる、優れた大将の特徴と、その下での主従関係について見てみよう。

① ばかなる大将との対比

第一に、馬鹿な大将の最も端的な特徴は、武士の大将でありながら、武事を疎かにして芸能に打ち込むという点であった。それとは対照的に、優れた大将は、戦を生業とする武士として、まず何よりも武事を優先させる。そして、そのような武士の下では、家臣も武事に励む。このような大将の下での主従は、戦に勝つことを共通の目的として、お互いが他事に優先して武事に励むようになる。

また、馬鹿な大将は、山本勘助のような、戦に勝つための優れた技術を持った家臣を取り立てず、佞臣を取り立てたり、芸能好きを褒めたりしていた。他方、優れた大将とされる信玄は、勘助が戦に勝つた

めの技術において卓越している点を見抜き、それを取り立てた。

信玄統治下の武田の家中では、戦に勝つための技術が重視されていたとされる。このような家中の主従関係は、戦に勝つための技術に優れた主君と、同様の家臣とが、お互いに技術を学びあう、戦に勝つための技術に優れた家中となるはずである。そこで共有されていた高度な技術の一端は、『甲陽軍鑑』の末書に詳細に記された築城、攻城術、陣立てなどから伺い知ることができる。その他、戦の個々の戦略や戦術についても、高度な技術が共有されていたことは疑いようがない。[14] ここに、優れた大将・武田信玄とその家臣団の、戦に勝つために高度な技術[15]を共有する主従関係を見て取ることができる。

② りこんのすぎたる大将との対比

第二に、利口過ぎる大将の端的な特徴は、私利私欲を満たすために家臣や下々のものから搾取し、慈悲がない、ということであった。その結果、家臣も私利私欲を満たすために働くようになり、より下の者に対する慈悲もなく、主君に対する忠義もなくなるとされる。それとは対照的に、優れた武士の大将は、慈悲があるという。例えば、自分の采配で勝った戦でも、部下の手柄とするというのがそれに当たる。このような大将の下では、慈悲の心で接された家臣もまた、その多くは大将に感化され、より下の者に慈悲の心で接することになるだろう。また、慈悲の心で接せられた家臣は、主君を有難く思い、忠義の心で奉公に勤め、武事に励むようになるはずである。つまり、利口過ぎる大将のもとで、上の者が下のものから搾取する構造が連鎖し、下のものも私欲を満たすためのみに働き、上下が奪い合う関係になっていたのに対して、優れた大将の下では、上のものは慈悲の心で下のものに与え、下のものは上のものを有難く思い、忠義を尽くす、という与え合う関係が、連鎖的に家中に行き渡ることになる。その結果、家中の主従の契りは強固なものとなり、戦の際には一致団結して最後まで戦う強い軍勢となるはずである。

また、『甲陽軍鑑』の慈悲は、単に与える、といった意味に留まらず、それぞれに相応しい持ち場を与え、そこで持てる技術、能力を存分に発揮させ、それがもたらす充実感を与える、という意味で使われるときもある。これは、特徴的なところなので、煩瑣を厭わず、関連する箇所を引用して確認しておこう。文脈上、利根過ぎる大将が私欲を満たすために行儀が悪く義理も分別も慈悲もないことと対比されるところである。

> よき大将は行儀よければ義理深し。義理深ければ分別あり。分別あれば慈悲あり。**慈悲深ければ**、たとひ生れ付きにて様子はそゝけても、**心静かにしてそれ〴〵に人を見知りてつかひ給へば、一人として恨み申すべきやうなし**。（「品第十二」）

ここで注目したいのは、優れた大将は慈悲が深くそれぞれに人を見知って使うので、一人として恨んでいる様子がない、とされている点である。ここでは慈悲の深さの具体的な現れが、人の能力や特徴をよく知って適材適所で人を使うため、誰からも恨まれないこととされているのである。

このような慈悲のある大将の下では、家臣達はそれぞれ能力相応の立場と知行などを与えられ、存分のその能力を発揮して働く充実感を得ることができるようになるはずである。これは、国を滅ぼす大将の下で、優れた武士が佞臣に排除されて持ち場を失い、十分に働けず、絶望させてしまったり、不満で離れていってしまったりするのとは対照的である。また、このような慈悲は『三河物語』で強調される主君の御慈悲やお情けといった通常を超えた贈与とも異なる。むしろ、ありのままに家臣の能力を見分け、それに相応しい仕事と知行を与える、いわば通常を超えない適切な贈与を完璧にできるところが、『甲

陽軍鑑』の語る優れた大将の慈悲なのである。

③　よわすぎたる大将との対比

第三に、弱すぎる大将の特徴は、心が弱くて臆病で、是非善悪を見分ける分別がなくて自分で決断できず、人の意見によって考えをすぐに変えてしまう。また、人を貶める家臣の讒言を喜ぶ、というものであった。その結果、戦で活躍することもなく、家臣の心を捉えることもできない。そこで、家臣の歓心を買うために、器用な大将のふりをして、対応する手柄がないにも関わらず、知行などを与える。しかし、それは佞臣の私腹を肥やし、自分の領地も減らして家中や外に向けての大名の相対的な力を弱めてしまう。さらに、このことは信賞必罰ができないということなので、優秀な家臣のやる気を削ぎ、かえって国家の力を弱めてしまう。また、愚かな大将は、分別がなく、相手を理由もなく貶める家臣に乗せられてしまうので、強い敵をそれと見分けることができない。つまり、ありのままの事実を見抜けず、誤った見積もりで戦に臨むことになる。弱すぎる大将は、これらの結果、家臣との強固な関係を築くこともできず、対外的な戦でも敗北し、家を滅ぼすことになる。

それとは対照的に、優れた大将は、心が強くて勇敢なので、武事に励み戦でも活躍し、また、自ら分別を持って決断しそれを安易に変えないので、家臣に尊敬される。知行を与えるときには、贔屓ではなく、事実に基づいて信賞必罰を実践するので、家臣も甲斐があって励むことになる。大将も家臣も武事に励むので、戦には強く、家は栄える。また、優れた大将の家中では、大将も部下も、裏付けもなく相手の大将や人を嫉み貶めることがなく、優れたものは敵でも褒めるので、常に油断がなく、外部からは安易に攻め込むことができない。

④　つよすぎたる大将との対比

第四に、強すぎる大将の特徴は、強みが過ぎて、長期的に勝ち続ける思慮分別がなく、十のうち十まで勝とうとすることであった。そしてその結果、勇敢で優れた家臣のほとんどを戦で殺してしまい、国の弱体化を招いてしまう。また、家臣との関係でいえば、出世のために主君の気に入ろうと長期的な思慮もなく強行策を進言する佞臣の言いなりになって、優れた家臣の諫言を聞くことができないという関係であった。その結果、策が強行策一辺倒になり、優れた家臣を殺してしまい、国を弱め滅ぼしてしまう。

他方、優れた大将は、長期的に勝ち続けるための思慮分別を持っているので、強みがあるとはいっても、十のうち、六か七の勝ちを続けることを目指して、無理にすべて勝とうとはしない。相手を攻める際にも極力慎重策を採り、無理攻めはしない。家臣との関係も、戦の前には、家臣と地図や模型などを使って、事前に詳細にシュミレーションし、家臣の意見を十分に言わせ、聞くべき意見は柔軟に聞いており、さらに、歴戦の将で強行に反対する者が一人でもあったら、その戦はしなかったとされる。このように、優れた大将は長期的に勝ち続ける思慮を持ち慎重であったので、優れた家臣はあまり消耗しなかった。また、優れた家臣の意見を採り上げるので、家臣は生き生きと活躍し、戦でも長期的に勝ち続けることができたのである。

注

（1）『日本倫理思想史』下巻第五篇「後期武家時代における倫理思想」（岩波書店、昭和二七年）。以下、本稿での和辻の理解は同書による。

（2）「『甲陽軍鑑』の世界」（『日本人の伝統倫理観』理想社、昭和三九年）。以下、本稿での相良の理解は同論文による。

（3）『三河物語』の「徳川三引付」については、佐藤正英「武士の思想主従関係をめぐって」（『季刊日本思想史』第四号、平成九年）および拙論

「武士道における武辺、慈悲、情けについて」（『江戸川大学紀要』第二九号、令和元年）参照。

（4）平山優『山本勘助』（講談社現代新書、平成一八年）第四章参照。

（5）本稿での『甲陽軍鑑』からの引用は、酒井憲二編『甲陽軍鑑大成』（汲古書院、平成六年）による。ただし、読みやすさに配慮し、カタカナをひらがなにしたり、意味が分かり難いひらがなを漢字にしたりするなど、原文の意味を損ねない範囲で、適宜表記を改めることにする。なお、出典を書く際には、書名は省略し、品数のみを記す。

（6）馬鹿の内実について、和辻哲郎はうぬぼれゆえに下のものに智恵を盗まれる、という点を指摘しているが、武士としてなすべき武事を優先しない、という肝心の点については見落としている。相良亨の要約も、この点にいちおう触れてはいるものの、強調まではしていない。しかし、馬鹿の内実について、この部分から第一に押さえるべきは、「我が身をわすれ」「弓矢のみちへはをとさず」「弓矢のみち、ぶこころがけにて」とあるように、武士でありながらその立場を忘れ弓矢の道＝武事を疎かにする点である。

（7）『甲陽軍鑑』の本文では、この「無慈悲」とまとめた部分が少し後の文脈と連続していて、かつ間に、少し話題の変わった具体例が挿入されていることから、前の文脈とのつながりがやや見えにくいところである。しかし、和辻は、ここでの内容と文脈を正確に理解し、この部分を「無慈悲」とまとめている。本稿もそれに従う。

（8）この、自惚れている点について、和辻は馬鹿な大将と共通するとしつつも、馬鹿な大将が自分のすることは何でも良いとするのに対して、利口過ぎる大将は「他への対抗心が先に立つ」という相違点についても指摘している。細部に行き届いた鋭い解釈であり、従うべきであろう。

（9）『甲陽軍鑑』では「則政」と書かれているが、本稿では今日の一般的な表記に従い「憲政」で統一する。

（10）和辻哲郎は、この弱すぎる大将の性質を「すなわち道義的性格が弱すぎるのである。」とまとめている。しかし、ここでの弱さが「道義的性格」とまとめられるかどうか疑問である。やや先取りするが、後に弱すぎる大将の具体例とされる上杉憲政の弱さは、端的には、戦の際、自分で出陣しないことがそれに相当する。それを道義的に解釈すれば、持ち場を守る勇気がない、と理解できるかもしれないが、対比される優れた大将の強さという点から考えると、そのような道義には収まらなくなる。『甲陽軍鑑』の語る優れた武士の強さとは、持ち場を守る勇気というような道徳に留まらず、武士は顔を打たれたら我慢せずに相手を殺せ、というような武張ったものであり、それは領地を犯されたら出陣して相手を殺す強さ、さらには、防衛に限らず、敵対勢力の領地へ侵攻して相手の領地を奪い取り、滅ぼす強さにまでつながる。それは、少なくとも一般的な道義の意味に収まるものではない。このような、武事において相手を殺す強さがないことまでが、弱すぎる大将の弱さには含意されているのではないだろうか。

（11）この、人の意見によって自分の意見を二転三転させて一貫しない点は、弱すぎる大将の心の弱さから出ており、また決断の鈍さに相当する。

（12）この点について、相良前掲論文は「手の外」なる大将と言い取り、行き届いた解釈をしている。

（13）独立した判断をする一部の優れた侍以外のものはどうだったのかという点については、本稿で考察の対象とした大将論の部分からは読み取ることができなかった。むしろ、一切独立した判断をまじえず、大将や優れた侍の指示通りに動くことが求められている可能性もある。この点についての吟味は、将来の課題とする。

（14）例えば、信玄統治下の武田家では、山本勘助の築城、攻城術などが「山本勘助入道道鬼術」として家臣の一部に共有されていたとされる。『甲陽軍鑑』末書下巻、および平山前掲書参照。

（15）この点、和辻は、『甲陽軍鑑』では技術より心構えを重視しているとし、かなりの紙面を割いて論証している。その際、山本勘助が「兵法仁」とされ、単なる武芸者とは区別された心構えの優れた武士であった点を例として挙げている。しかし、山本勘助の兵法仁としてのすごさは、心構えはもちろんだが、その心構えは、戦に勝つために調べ考え抜かれた技術とセットになっており、両者は切り離せないものではないだろうか。すでに触れたように『甲陽軍鑑』末書には、築城術や陣立てについての詳細な図や説明が掲載されている。確かに、その多くは「口伝」とされ、判然としない部分も多いが、その「口伝」とされていたことが、かえってその技術を重視していたことを裏付けるとも考えらる。戦の技術という性質上、技術が大切だからこそ、その詳細は、外部には漏らせないからである。